

# 造反有理

文革樓の殺人

稲羽白菟いなばはくと

装画 喜国雅彦  
装帧 坂野公一 (welle design)

## 東京

「お待たせしました」

帝国ホテル最上階のラウンジ。皇居の常緑林を見晴らす初秋の昼下がり。

耕文文化財団の職員、堀口氏にはこやかな笑顔と一人の青年を携えて戻った。

「ヤシロさんをお連れしましたよ。……ヤシロさん、こちらが今年の河竹黙阿弥戯曲賞の受賞者、サイモン・リーさんです」

挨拶のため立ち上がろうと肘掛けに手をついた私を、青年は慌てて制止した。

「いや、どうかお座りになったままで。……本日は授賞式前のお忙しい中、貴重なお時間を頂いてありがとうございます」

ミステリー作家というから相応に変わり者かと思っていたが、老人の足腰に気遣いできる青年ではあるようだ。

「ご配慮ありがとうございます。では、遠慮なく。……こちらこそお目にかかれて光栄です」

立ったまま、座ったまま頭を下げ合う私たちに、堀口氏にはこやかに声を掛けた。

「さあさあ、ヤシロさんもお座りになって下さい。授賞式までまだまだ時間はありますが、この方の波乱の人生を取材するのに、どれだけ時間があっても足りませんよ」

「いや、しかし……」

青年の視線は正面の空席、堀口氏の顔、私の顔、三点を見比べるようにして彷徨さまよった。

広い窓を背にする奥側の席を上座と捉えて、そこに座るのは年上の私に失礼ではないかと彼は心配しているようだった。

私は言った。

「さあ、どうぞそちらに。のんびりと皇居を見晴らすこの場所が気に入って、私はこちら側に座らせてもらっています。おしゃべりしながらふと外を眺めてしまいかもしれませんが、その時はどうかご容赦を」

「では……失礼します」

青年は窓を背に座る。

彼が座るのを見届け、堀口氏は長軀を少し折るようにならせた。

「授賞式とパーティー、その他諸々準備がありますのでひとまず私はこれで失礼させて頂きます。また、時間が近づいたらお迎えに上がりますから、控室代わりということ、どうぞここでのんびりお過ごし下さい。何かご用があればお電話を」

ホテルのマネージャーばりの笑顔を浮かべ、堀口氏は厚いカーペットの上を颯爽と去って行く。

遠くまでその背中を見送り、私はあらためて正面の青年に目を向けた。

授賞式のために新調したのか、張りのある紺のスーツにカラフルなネクタイ。その柄に目を凝らすと、どうやら色々な国の国旗が細かく織られた柄のようだ。ファッションセンスに関しては、やはり少し変わり者なのかもしれない。年齢は三十代ぐらいだろうか？ あるいは若く見える四十代ぐらいかもしれない。しかし、いずれにせよ老人の私からすれば「青年」であることに違いないだろう。

青年はスーツの胸ポケットから名刺入れを取り出し、礼儀正しく私に一枚差し出した。「改めまして、ヤシロオトヤと申します。よろしくお願いいたします」

受け取った名刺には「屋代於菟也」という名前。

肩書きは——ミステリー作家。

添書きは——第三十回耕文ミステリ文学新人賞受賞『大阪万博殺人事件』。

そして、端には小さく携帯の電話番号とメールアドレスが書かれている。裏を返して見る。他には何も書かれていない。最近の作家というのは名刺に住所を書かないようだ。

名刺を押し戴き、私は詫びた。

「普段名刺なんて必要のない立場の人間なもので、私は名刺を持っていませんよ。申し訳ありません」

「いえいえ、いいんです。どうか、僕の名刺だけ、お受け取り下さい」

名刺を眺めながら、私は言った。

「ありがとうございます。受賞作の『大阪万博殺人事件』……今年の、大阪万博が舞台なのですか？」

「いえ……」 恥ずかしそうな笑みを浮かべ、青年は言う。

「確かに今年の万博イヤーに合わせて書いたことには違いないのですが、約半世紀前の一九七〇年、太陽の塔のほうの大阪万博が舞台の小説です。……先生は行かれましたか？ 当時の大阪万博」

「いや、私が日本に来たのは日中国交正常化の後の一九七四年ですから、残念ながら」

「ああ、そうでした——」 青年は宙に書いた年表を見上げるようにして言った。

「日中国交正常化は七二年、確か七〇年の万博には台湾の『中華民国館』はあったけど『中国館』はなかったはずですね。国交正常化の後、単独で『中華人民共和国展』というのも万博跡地で開催されたようですが、しかし七〇年、中国はまだ文化大革命の只中であって、とてもそれどころではなかった。……そうですね？」

「そうですね。私はなんとか生き延びましたが、多くの人があの悲惨な混乱の犠牲になりました」

「先生の受賞作、『女后』は文化大革命を主導した毛沢東夫人、江青が主人公の戯曲なんだそうですね。まだ拝読できていませんが、堀口さんにお願ひして是非読ませて頂きたいと思っています」

「それはそれは——」恐縮の笑みを浮かべ、私は応えた。

「知り合いの演劇青年に頼まれて書いた素人の手慰みのような芝居です。面白いかどうか……」

「いやいや。ご経歴によると先生は北京の清華大学、文学部のご出身だそうじゃないですか。文学の勉強なんてしたことのない僕からすれば、そんな先生が素人だなんてとんでもないですよ。それに、実際にあの時代を生き抜いた方が描く文化大革命の戯曲……とても興味深いです」

「あなたと同じように思っ、財団の方も上演に目を留めて、授賞して下さったのかもしれない。来年で丁度、文化大革命が始まってから六十年、終わってから五十年の節目の年です。そのおかげもあるかもしれませんね。あなたと違って、そのタイミングに合わせて書いたつもりはありませんでしたが」

冗談を言ったつもりだったが、老人の軽口は若者の耳には皮肉のように聞こえたかもしれない。

慌てて笑顔を作り、私は話題を変えた。

「……ところで、屋代さんの『大阪万博殺人事件』は一体どんなお話なんでしょう？」

「ああ……」嬉しそうに青年は笑った。

「今回の万博に関連して、七〇年の大阪万博の色々な資料を集めたイベントがあったんです。そこで『日本万国博覧会 会場施設図面集』っていう図面資料を見せてもらったんですが、これがまた、どのパビリオンの見取図もびっくりするほどミステリー映えるんですよ。……たとえば、陸の建物と池の真ん中の建物が長い橋で繋がった『松下館』、いくつもの六角形が重ね合わさったような『化学工業館』、地上と地下の球体が縦に連なる『リコー館』、巨大な円盤が宙吊りになった『オーストラリア館』。あと、今はもう撤去されてありませんが、当時は『太陽の塔』を囲む形で、会場の中央には鉄骨で造られた丹下健三設計の『大屋根』があって、太陽の塔の腕の部分から大屋根に出るのが順路だったようなんです。どの建物の構造も凝っていて、これはもう、『館もの』のネタの宝庫じゃないか！ と思ったような次第で……」

青年は嬉々として喋り続ける。好きな話題には饒舌になる——今どきの若者によくあるタイプだ。しかし、ミステリーに疎い私には彼の言いたいことが今一つわからない。

おそらく「館もの」というミステリーのジャンルがあつて、彼はきつとそれが大好きなのだろう。要領をつかんでいない私の様子に気付き、屋代青年は「あ——」と言って話を区切った。

『館もの』というのは、まず第一にユニークな形をした館があつて、まあ、だいたいその館が閉ざされた密室的空間になることが多いんですが、その館を舞台にしてロジカルな殺人事件が起こるといふ、ミステリーの一ジャンルのことを言います」

「屋代さんは、その『館もの』が大好きという訳なのですね」

「はい！」

屋代青年は満面の笑みを浮かべた。

「ミステリー小説の冒頭に館の見取図があるだけで、僕なんかは大興奮してしまいます。たとえ館の構造がミステリーのトリックや真相にそれほど関係がなくなっても。……まあ、『館もの』の魅力の核心は、実は建物自体にある訳ではありませんからね。綾辻行人先生の作品群をお読みになれば、その意味はお解りになるかと思えます」

読んだことはないが、その作家なら私でも知っている。

「あ——」話が大きく脱線していることに気づいたのか、屋代青年は再び言葉を区切った。

「ということで、僕の『大阪万博殺人事件』は七〇年の大阪万博、いくつかのパビリオンを舞台にした『館もの』の連作短編集になります」

「なるほど。それは面白そうですね……」

ユニークな形の館。

密室的空間。

ロジカルな殺人事件。

不意に、あの事件の記憶が私の心に蘇る。

文化大革命の渦中、江青の標的となった人々が匿われた、山奥の仙郷、あの円楼の——。

ぼんやりする私の顔を、青年は不思議そうに眺めている。

「……どうぞどうぞ、心ゆくまで東京の眺望を楽しんで下さい」

最初に伝えたように、私が窓の外の皇居に見惚れているのだと青年は思ったようだ。

そういう訳ではなかったのだが、かといって、あの日々の記憶は簡単に説明できる話でもない。

テーブルに置いた名刺に視線を落とす、私は再び話題を変えた。

「しかし、随分ユニークなお名前ですね。……あなたもペンネームなんですか？」

「僕の名前、ですか？」——青年はまたもや嬉しそうに話す。

「僕の好きな小説に、屋代という名前の作家が出てくる作品があるんです。そこからとったペンネームなんです。好きな作品や作家とか、自分の創作の原点とか、そういったところから、ペンネームつけて付けるものじゃないですか？」

「……」

そうなのだろうか？

まあ、そうなのだろう。

私が気になったのは「屋代」ではなく「於菟也」の方なのだが。

於菟也の由来について特に説明することはなく、屋代青年は「ふーっ」と大きく呼吸を継いだ。

「七〇年の大阪万博の方が圧倒的に魅力的ですが、今の万博にも、終わらないうちには非一度は行っておきたいですね。……先生は関西にお住まいなんですよね？ 行かれました？ 万博」

「ほぼ毎日通っていますよ。今日も、本当は万博会場にいるはずでした」

「え？ 毎日、ですか？」

屋代青年は目を丸くする。

無駄に驚かせても仕方ないので、私は早々に種を明かす。

「普段、私は万博会場の清掃の仕事をしてるんです」

「え？ 黙阿弥賞作家のあなたが、清掃のお仕事を？」

清掃の仕事を見下しているという訳ではなく、青年は単純に驚いているようだ。

半ば独り言のように、青年は続けた。

「まあサラリーマンの僕が言えた話ではありませんけどね……。きつと、ずつと兼業なんだろうし。いや、兼業でも作家であり続けることができれば御の字なんだろうな。世知辛いですね、世の中は」

私は笑って左右に首を振る。

「なに、文革の頃に比べれば何もかもが天国のようですよ。仕事なんて何一つままならないほど、国中が混乱していたんですから。……日本に来てから、私は長年神戸の南京町のレストランで給仕の仕事をしていました。しかし、さすがに歳も歳。重い盆を持つのが覚束なくなってしまうてね。それで清掃員に転職という訳です。料理の皿に比べて、箒やブラシの軽いこと……。万博会場の大屋根の内側をぐるりと回って掃除するのも、これがなかなか気分が良いものなのです。健康法と実益を兼ねた、老人にとっては決して悪くない仕事です」

空を円く切りとる円形の大屋根。

あの円楼と同じ形の空が、ふと、あの悲劇を思い出させる瞬間がある。それだけは、辛いことではあるけれど……。

「実は先生、その、文革なのです——」それまでとは違った低いトーンで屋代青年は言った。

「堀口さんもお伝え下さっているとは思うのですが、僕は今、受賞後の第一作、次の小説を書く準備に取り掛かろうとしています。先生は気にしていないと仰言っていたので、自分の浅ましさがお恥ずかしい限りなのですが、来年の文化大革命終結五十年、文革の節目の年を当てこんで、文化大革命をテーマにミステリー小説を書けないものだろうかと考えています。そこで、文革を生き抜いて、今、日本にいらっしゃる先生に、当時のお話などを聞かせて頂けないかと、この席を設けて頂きました」じっと私を見つめる青年を、私もしばし見つめ返した。

「面白い話なんて何一つありませんよ。あの悲惨な十年間、中国のどこにだって。きっと何一つ」

「わかっています。僕もいろいろと資料を調べてみましたが、元々漠然とイメージしていた数十倍、いや、数百倍も中国全土が恐ろしい状況に陥っていて、調べれば調べるほど、あまりの恐ろしさに僕自身肝が冷える思いでした。しかし、そんな人類史的な極限状態だからこそ、湧き上がってくる人間のドラマがあるのではないだろうか？ 僕はそう思うんです。もし先生がそんな物語をご存知なら、未来のため、僕に語り継がせて欲しいのです。エモーショナルなノンフィクションや歴史小説ではなくて、淡々と人間を描く本格ミステリーだからこそ、冷静に描くことができる人間のドラマもあるのではないかと？ 僕はそう考えています」

「……」

「恐ろしい文革の首謀者、江青の物語を、先生が現代の悲劇として戯曲に昇華させたように、あの時代そのものが生み出した恐ろしい犯罪——文化大革命の殺人を、僕が小説にすることは不可能でしょうか？」

「……」

あの時代の残酷で悲惨な事件を、青年は私の実体験から取材したがっている。

確かに、文革の嵐の中、暴力、抄家（家宅搜索と略奪）、拷問、武闘、虐殺……数えきれないほどの非人道的な行為を私は目の当たりにした。しかし、それらは本当に無軌道、無秩序なもので、そこに論理的で美しいミステリーの題材となるような筋や道理はたった一つもなかったのである。

だが、しかし——。

周恩来首相の特務によって匿われたあの山奥の円楼——私が一時期を過ごしたあの閉ざされた館で起きた連続殺人事件は、文革の混沌と無秩序の時代にあつて、私が知る、そして私自身が体験した、唯一「理由」のある大量殺人事件だった。

事件の最後、文革の吊し上げの象徴である白い三角帽を自ら被って死んだ犯人には、犯人なりの筋が通った殺人の動機があつた。

そして、事件の謎を解いた、私が人生で唯一出会った「名探偵」。  
私たちを救ってくれた、今なお忘れ得ぬ私のヒーロー……。

私の戯曲『女后』は、あの円楼の事件の外部、北京中南海、江青の執務室では一体どんな陰謀が繰り広げられていたのか？——ということに想像を膨らませたことが執筆の原点だった。

円楼の内部で起きたあの事件自体の記録を、「館もの」が好きだというこの青年に書き残してもらうのも、案外悪いことではないのかもしれない。

しかし、あの複雑怪奇な事件の全貌を、私は正確に語り尽くすことができるのだろうか？  
そしてこの作家に、それを書く力はあるのだろうか？

「……先生、如何でしょう？」

考え込む私の顔を覗き込み、屋代青年は真剣な表情で言った。

慎重に言葉を選び、私は答えた。

「一つだけ、お話ししておきたいと思う話があります。江青たち、文革を主導した四人組の非道を最後まで阻止しようと努め続けた私たちの命の恩人、周恩来首相、そして彼の特務たちにも関係する話なので、世が世なら最大級の秘密としなければならぬ類のお話です。しかし、まあ、さすがにもう時効ではあるでしょう。そして……」

窓の外の空を見遣り、私は言った。

「少しひねくれ者だったけど、ある意味中国を救ったとも言える忘れえぬヒーロー、そして事件を解決してくれた『名探偵』も登場するお話です」

「名探偵……ですか……?」

驚いたような表情で、青年は言葉を漏らした。

私は続けた。

「しかし、何かからお話しすれば良いものか。……そうですね、まずは建物について。中国南部、江西省や福建省、湖南省あたりに『客家円楼』という独特な建築様式があります。華僑として日本にも多く移り住んでいる『客家』と呼ばれる血縁を大事にする人々が、親戚同士、一族一門で居住する、戦乱や山匪の襲撃時には要塞にもなる堅固な円形の建物です」

「先生……」

青年は驚いた様子でつぶやいた。

「まさかの、『館もの』ですか?」

「……」

しばし考え、私は応えた。

「あなたの言う『館もの』かどうかわかりませんが、文革の一時期、私は確かに山奥の閉ざされた館に匿われていました」

「先生と、他にどんな人たちがそこに?」

「それは今からお話しますが、その前に屋代さん、一つお願いがあります」

「はい、何でしょう?」

「その、先生せんせいというのは止して下さい」

「わかりました。では、何とお呼びすれば？」

「そうですね……」

半世紀前の遠い記憶を思い出しながら、私は答えた。

「蔡文さいぶん——とでも」



造反有理  
文革樓の殺人

---

目次

東京

3

# 第一部

## 革命無罪

すべては革命のために

円楼

一

29

北京

二

55

円楼

三

64

北京

四

82

円楼

三

95

曲阜

四

118

円楼

四

130





## 第一 部

# 四旧打破

すべてを打ち倒せ

北京	162
円楼	169
北京	193
円楼	204
上海	227
円楼	242
北京	283
円楼	291
東京	336
大阪	340



## 第二部

# 懷疑一切

すべてを疑え

円楼	九	347
武漢	十	381
円楼	十	391
長沙	十一	443
円楼	十一	453
円楼		482

# 第四部

## 造反有理

すべてを覆せ

北京	十二	489
円楼	十二	499
井岡山	十三	514
円楼	十三	524
円楼	十四	544
北京	十五	588
円楼	十五	600
大阪		610
東京		616

解説 千街晶之  
参考資料

主な登場人物

【円楼内】

李蔡文 りさいもん  
白趙英 はくちやうえい  
劉小青 りゅうせうせい  
楊紫鳳 やうしほう  
董英傑 どうえいけつ  
呂伯琴 りよはくきん  
薛宝勝 せつほうしょう  
积晓雲 しやくきやううん  
王若水 わうじやくすい  
彭昭徳 ほうしょうとく  
柳雪蘭 りゅうせつらん  
陳順景 ちんじゆんけい  
馬春世 ましゆんせい  
宋翠玉 そうすいぎよく

劇作家・北京市文化局員  
詩人・上海市文化局員  
推理小説家  
北京の京劇俳優・男旦（女方）  
上海の京劇俳優・浄（立役）  
イタリア帰りの作曲家・指揮者  
科学者・清朝典医家の末裔  
曲阜の烈僧  
上海の女優  
元解放軍元帥  
彭昭徳の孫娘  
宣統帝の元専属料理人  
円楼の家政係・賀子珍の看護婦  
纏足の老女

【円楼外】

張同志  
ちやうぢ

円楼の外部連絡員

江青  
かうせい

毛沢東夫人 四人組の一人

張春橋  
ちやうしゅんきやう

四人組の一人

姚文元  
やうぶんげん

四人組の一人

王洪文  
かうこうぶん

四人組の一人

楊銀嶺  
やうぎんれい

江青の秘書

汪東興  
かうとうこう

中央警備局長 中南海人事担当主任

林彪  
りんひやう

国防部長・毛沢東の後継者候補

葉群  
やうぐん

林彪夫人

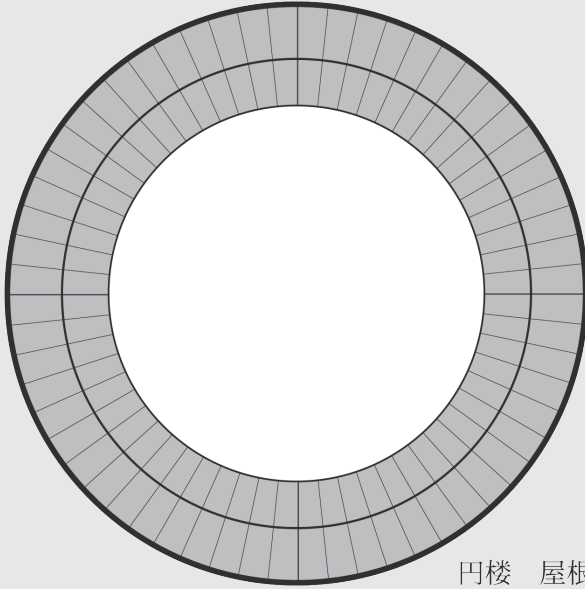
林立果  
りんりつか

林彪の長男・空軍作戦部副部長

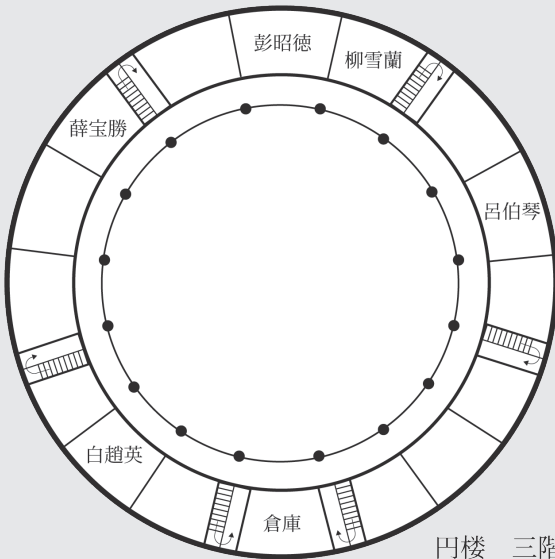
武則天  
ぶそくてん

中国史上唯一人の女帝

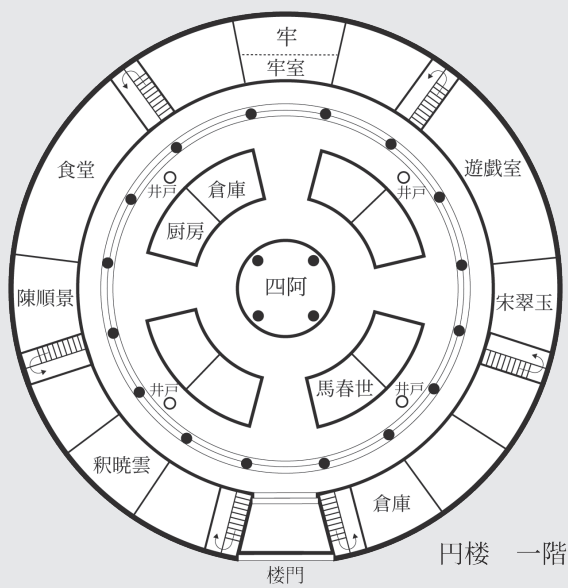
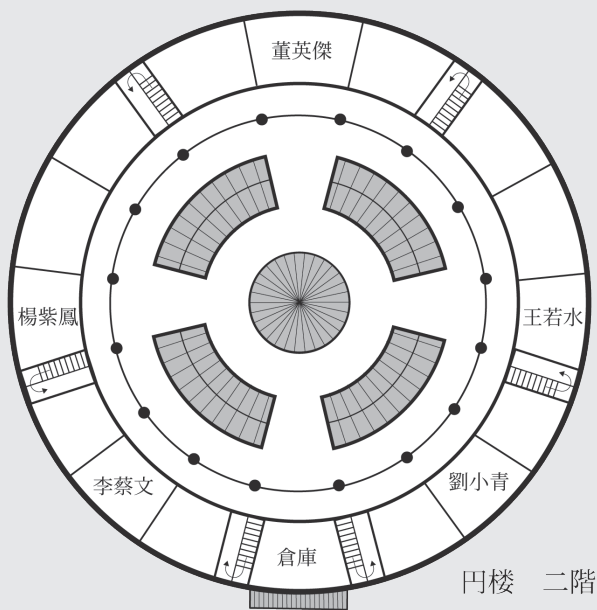
文閣楼 見取図



円楼 屋根



円楼 三階



## 関連地図



第一部

革命無罪

すべては革命のために